

二十五 ハーバーマスの哲学をかじる

暮れから正月初旬まで、J・ハーバーマスの著作『自然主義と宗教の間』をたどたどしく読んだ。以前に雑誌で一つ二つ時事的な問題への発言を読んで、すでに高齢でドイツを代表する哲学者として名を知っていた。この論集を読んでみる気になったのは、タイトルに誘われてのことである。自然科学のずいぶん発展した現代の自然観から宗教をどのように捉えるのか、哲学者の議論を知りたかったのである。こんどこの書物にとりくんでみて、カント以来のとくにドイツの先達の哲学を継承発展させて現代的に論じようとする姿勢は、信頼のおけるものだと思った。その論じ方は正攻法で、フランスのポストモダン哲学者とずいぶん感じが違う。

この書物は、二十一世紀初頭に書かれた文章を集めたものである。社会や政治を主題として哲学する人は、本の三分の二を、現代社会で目立つ宗教的な現象の考察に当てている。そこでの重要な論点が表題になったものと思われる。ただし、第一部は、人間の思考を支える精神がどういうものかを論じたものだ。ハーバーマスは、近代哲学の礎石となったカントの理性を、現実的な人間精神のあり方のなかに置いて「脱超越論化」して捉え直す。

この第一部は、これまでいくらかかじってきた話題でもあり、おのずと関心が強く、もう一度「理性批判」を学び直す機会になった。記憶力のないわたしは、感心した文章に出会うと、時間のゆとりがあれば日録に書きとめる習慣があり、こんどもそうした。記憶を新たにするためにもいくつかを引き写し、ハーバーマスの考え方をたどってみる。

まず、わたしの実情を指摘する文章がある。——われわれの思想の獨創性が乏しければ乏しいほど、みずからの生成の文脈に縛り付けられたままになります。しかも、さらにその思想は自分が由来する生活史そのものであり、それどころかしばしばそれだけでしかないのです——。まことに、これを戒めとしなければならぬ。

ハーバーマスは、社会的な存在としての人間を考える。カントの認識論と、「先験的」・「客観」などの概念が、人間の具体的なあり方と関連づけて焼き直される。

講演は言う。——人間は社会的諸関係の公共的ネットワークに根源的にうめこまれることで初めて、自己を人格となす能力を発展させる動物なのです。……主体的精神は構造と内容を、もともと社会化された諸主体の間主体的交通という、客観的精神との接続から受け取る。……言語は世界の鑑ではなく、世界への入り口を開示するものです。その際、言語はわれわれの眼差しをつねにすでに世界へと特定のやり方で誘導しています。言語には

たとえば世界像のようなものが記入されています。……述語ないし概念の意味は、それらの助けによって行われる経験の光に照らして、ふたたび修正されうるのです——。

「理性の脱超越論化」についての論述が、上の考え方をさらに明確にする。——私たちが判断を下したり扱ったりすることができるといふさまざまな対象が独立に存在していて、「世界」とはそれらの総体であるという想定である。「判断可能」な対象とは、それについて何らかの事実を言明しうる一切の対象である。これに対して、目的の達成に向けて働きかけるという意味で、「扱う」ことが可能であるのは、時間空間の内部で同定しうる対象だけである。……明らかなのは語用論的な世界想定は統制的理念ではなく、それについて事実を確定できる一切のものを指示しうることに對して、「構成的」であるということである。……経験と判断は、いまや現実の問題に對処する実践に結びついたものとなる。……そもそも事実認定は、学習過程、問題解決、主張の正統化といった営みの結果として生じる。……もろもろの対象の(事実ではなく)総体として想定するこの「世界」を、真なる言明によって叙述可能なことのすべてからなる「現実」と混同してはならない。……言語および行為能力を有する主体は、彼らのそのつどの生活世界の地平からのみ世界内の物事に向かうことができる。文脈からまったく自由な世界などというのは存在しない。……社会化された主体は、「つねにすでに」生活世界の文脈のなかにあり、かつ言語を用いた慣習

的実践を行なっているものであり、そうした文脈や慣習的実践が、一定の意味づけを与える伝統や習慣のペースペクティブから世界を開示して見せるのである——。

言葉はむずかしいが、世界をどのように把握すればよいか、現実的な理解が得られる。さらに考察は、カントの自由についての議論に進む。カントの名高い「お互いをけっして単なる手段として扱わず目的そのものとして扱う」などを確認して、「コミュニケーション」、「相互人格的」、「間主体的」などの言葉を使って、「実践理性」の問題を現代的に論じている。——カントにとって理性が本領を発揮するのは実践の領域であった。つまり理性が構成的であるのは、道徳的行為に対してのみであった——。

このあと第二部から、議論は、表題とした宗教と関係する問題に移っていく。宗教を議論にとり入れるにあたって、ハーバーマスは認識に関して境界線を引く。

——①世界全体のなかでの人間の位置を明らかにすると主張する世界像や宗教的教義同士の対立は、認知的次元で調停することはできない。②ポスト形而上学的思考は、存在するものの全体がどのように成り立っているかということに関する存在論的言明を当然放棄する。③自然科学は人間の自己理解と自然理解と自然全体のなかでの人間の位置づけに関わる理論的認識をもたらすが、そうした理論的認識と、そこから総合的に構成される自

然科学的な世界像とははっきり区別すべきである——。

人間の身体についての科学的な知識が増したのに対して、思慮深い哲学者は哲学の伝統に基づいた言説を提出する。——行為者は、みずから自分の身体と同一視し、また行為を可能とし行為への権限を与える肉体として存在するがゆえに、創始者としてみずからを理解することができるのである。……創始者はみずからを、自分の有機体、自分の振る舞いに刻印された生活史や文化、自分の動機や能力と同一視する。また判断する主体は、あらゆる外的な状況を、それらが制限並びに機会として重要である限り、自分の熟慮に取り入れる。……自由に行為する諸主体は、自然法則によって制御された物事の経過に介入し、新しい因果系列を「創設」する。……実践は、何か他のもの、つまり意識だけでは汲みつくされない肉体的なもの、理性に伝えられはするが理性とは質的に異なる何かを必要とする。……行為を制限する諸条件や行為へと誘う諸機会や自由処理可能な諸手段からなる自然法則によって規定された……——。自然科学で明らかになった知見から人間の本性を論じた書物が不十分だと感じているわたしには、さまざまな考察を経た哲学的な解釈の方が人間を深く捉えているように思われる(補遺一)。

いよいよ「信仰と知の境界」についての議論がくる。カントの立場が議論の出発地点で

ある。——カントの理性の自己批判はただ単に理論理性と実践理性との関係を説明するだけでなく、理性の正当化された理論的および実践的使用を、一方で形而上学的な認識要求の熱狂から、他方で宗教的な信仰確信の超感性性から区別することによって、理性自身を限界づけるべきものであった。これらの諸規定は、もしわれわれが信仰と知の関係に関して、現在の哲学的風景のなかで方向を定めることを欲するならば、今日でも依然として役立つことができる——。としながらもハーバースマスは言う。——カントは、「神は存在せず、また来世も存在しないと確信している」世俗的なスピノザに、自分の目的をただ自己のなかにのみ持つ道徳的行為の「もたざるを得ない」惨めな帰結からくる絶望に対する免疫を持たせようと欲した……。啓蒙主義者であるカントは、教会によって硬化させられた正統主義に反対して、理性と個人的良心の權威を認めさせようとする。他方でカントはモリストとして、不信仰の側の啓蒙された敗北主義にも反対するのである。懷疑主義に反対して彼は、単なる理性の限界内で正当化されるような、宗教の信仰内容と責務を救出しようとする。宗教批判は、救出しつつ我がものとすることというモチーフと結びついているのである——。この言い方は少し宗教に歩み寄ってカントを受けとめている、とわたしには見える。

ところで文中に、カントの「人間は道徳的意味において何であろうと、何になるべきで

あろうと、善にせよ悪にせよ、人間はそれに自分自身でなるにちがいない、あるいはなつたにちがいないのである」という言葉が引用されている。ここには深い洞察があるとわたしは思う。この言葉を厳粛に受けとめることが一大事だと思ふ。

第四部「寛容」の議論は、社会学者として、文化的多元主義を擁護する立場から書かれている。寛容を説くのにふさわしく、表現の調子はゆるやかである。ひるがえつて第四部よりも前の宗教に関する考察にも、社会学者としての思考法が色濃く出ているように思う。そして、著者がキリスト教世界に生まれ育つて、そこで思想をはぐくんできたことも、議論に大きく影響しているように思う。わたしが仏教的な考え方に親しんできたせいもあつて、ハーバーマスの考察に違和感を覚えるところがある。思慮深い哲学者を批判するのは畏れ多いが、無謀な感想を記す。

先述の世界とその認識についての①・②・③は、キリスト教ヨーロッパの世界観と無関係ではないと考えられる。わたしの浅い理解では、ゴータマ・シッタールタやナーガル・ジュナの思想の核心には、③の前半に言う理論的認識があるけれども、①や②のような構成された世界像や存在論的言明はもともと無い。ハーバーマスの考えているようなユダヤ・キリスト教的な教義(そこには世界の創造神がいて、その神はまた人格神である)と著

しい相違がある。宗教としての仏教には、たしかに古代インドの宗教的思潮が多く流れこんでいるが、基本思想は、構造として世界を捉えるあるいは堅固な存在を考えるヨーロッパの世界観とは大いに違う。それは関係性の世界である。「自然主義」と「宗教」を両極に置いて議論をくみたてようとするハーバーマスの構想からずれていると思う。もちろん、宗教となった仏教は、自然主義の対極をなすのだけでも。キリスト教が根強いヨーロッパ思想を継承する人には、存在ではなく関係性とそこでの人間のあり方に注目する思想がひよっとしたらよく見えていないのだろうか(補遺二)。

こう言っても、わたしは、宗教としての仏教を採ろうとしているのではない。ハーバーマスが「今日でも依然として役立つ」としたカントの諸規定に定点を据えて考えようとするのである。宗教と対置された自然主義について考察できなかったけれども、今のわたしは、「自然主義的」な世界観はまだまだ鍛えられる必要があるのだと思う(補遺二)。

補遺一

自然主義が哲学に鋭く切り込む問題がある。それは、哲学が長く問題にしてきた人間の「自由」は、自然法則に従って決定論的に生起する身体行動から自由か、という問いである。この問題を、ハーバーマスは、第三部「自然主義と宗教」の最初の第六章でとりあげる。章のタイトルもずばり「自由と決定論」だ。哲学者の議論はやはり重厚で、自然科学者が精緻な論理を積み上げて論じるのでなければなかなか敵わないと思う。人間の思索は広くさまざまなことに及び、自分の自覚的な生き方まで反省するから、そういう思索全部をひき受ける哲学の方がどうしても、この問題を、つまり人間を深く考えることになる。だから、この補遺一を予告した段落に引いたハーバーマスの文章はわたしを感心させる。次の第七章の議論にも説得される。章のタイトルは「確かに私自身が自然の一部である」、副題が「理性の自然との絡みあいについて語るアドルノ」。自身の師に当たるアドルノに沿いながら考察している。自然科学の知見を含みこんで、哲学的な論理を構築するという基本姿勢が貫かれる。行き過ぎた自然主義が、その論理を突きくずすのはむずかしい。この書物が「自然主義」と呼んでいる考え方については、ハーバーマスがとりあげたも

のしか見ることとはできない。だが、脳や神経回路などの身体機能について、自然科学的な実証実験によって得られた知見が一般書の形で出版されている。そのいくつかを読んで知るところが多かったが、わたしは、その考察が、長い哲学の探求が到達しているさまざまな考察に対抗できるほど十分に整理されている、とは感じなかった。通常、自然科学は決定論であると考えられているが、カオス理論や量子力学の確率解釈や複雑系など、素朴な究極に到達することはないだろうという考え方がありうる。まして、現在の知見をよく吟味して伝統的な哲学と比較検討する仕事はまだまだ不十分だと思う。とうぶん、自然科学は哲学的考察を豊かにするという役割を果たすことになるのだろう。

ここで、去年読んだ戸田山和久という人の『哲学入門』について述べるつもりだったが、記憶が薄れてしまつてそれができない。その書物は、自然科学の知見に基づいて新しい哲学を構築しようとする挑戦的な試みである。しかしわたしは、その議論から、どのように生きればよいかを汲み取ることが少なかった。だから、前段で述べた感想にとどまつたままである。なんといつても人は、哲学に、知識を得る以上のことを期待するのだ。

補遺二

ヨーロッパ人のなかにも例外的な人がいるようだ。文化人類学者レヴィ・ストロースは、『悲しき南回帰線』の最終節で、キリスト教と距離を置いた思索を記している。——仏教には彼方の世界がない。すべて根本的な批判に帰着するが、人類は批判が永久に可能であることを示すはずがないので、批判の究極において、仏陀は物と存在の意味の拒否として悟るのである。それは宇宙をないものとする教理であり、宗教として教理そのものもなくするのである。……わたしは他の人から、教えを聞いた先生たちから、書物で読んだ哲学者から、西洋が誇りとしているあの科学からさえ、賢者(仏陀)の樹下の瞑想を接ぎ合わせて編集した教訓の断片のほかにを教えられたらどうか。——もちろんこれは信仰を勧めているのではない。そして、レヴィ・ストロースは「懐疑主義者」でもないのだと思う。ここには科学という言葉も出てくるが、この人は、現存する宗教的世界観と自然科学的な知見の限界を識って、なお思索しようとしている。